

巖谷小波の出発

——『世界お伽噺』と木曜会——

I

明治二十七年十二月四日、巖谷小波は京都日出新聞社を辞して、元園町の父、一六居士の家に帰った。当時、日出新聞社は第四回内国博覧会の明治二十九年京都開催が一年繰上った為、その準備に追われていた。その最中に急遽退社する事になったのは博文館で発刊される雑誌『少年世界』の編集主任として招聘されたからである。「小波日記」
(明治大学蔵マ イタログラム)には、その経緯が次のように記されている。

明 27・10・19 大橋より帰京を促し来る 新返事大橋及尾崎へ与ふ

大橋とは大橋新太郎博文館副館主、尾崎とは尾崎紅葉の事である。

明 27・10・22 大橋より例の件

松 田 良 一

明 72・10・24 帰京の件につき尾 大へ書状贈

明 27・10・29 大手町の菊水屋に赴く 三時大橋来る 乃ち少年世界の件談合 兎も角も承諾 来月三、四日頃帰

西更に十一月末又十二月初日頃にて引払東帰の手筈なれり

明 27・10・30 午前大橋来訪 少年世界組織談合

明 27・11・5 帰西

明 27・11・7 午前雨森氏を訪ひ退社の件申込 彼大に当惑

雨森とは雨森菊太郎（蝶夢）京都日出新聞社々長の事である。

明 27・11・20 雨森氏来 後任の事

明 27・12・1 朝黒田来る 共に雨森を社に訪ひ入社に決す（筆者注 黒田とは黒田天外のこと）

明 27・12・3 池田来 同行に決す

日出新聞の文選の職工をしていた池田瓦山を同行させた。こうして『少年世界』の編集に取組み、その一方で『日本昔噺』二十四編の編著も担当するなど小波は〈少年物〉の活動を本格的に開始した。翌年十月になると郷里滋賀水口から黒田湖山が来て玄関子となった。

明 28・10・3 午前年峯来訪 又自今日黒田真道来宿

十一月には紫吟社の会合を小波の家で催す事になった。

明 28・11・16 夕方尾崎来 紫吟社句会 会するもの 紅 思 麦水 風谷 春葉 胡蝶 桜桃 瓦山 湖山等十一

時散

小波は俳句会を好んで開き、又秋声会の句会にもよく出席した。

明治二十八年の暮れ、尾崎紅葉の紹介状を持った尾上新兵衛（久留島武彦）が麴町の下宿から楽天居に移って来た。彼は近衛連隊の三等会計書記官であったが、兵營生活時代、紅葉の友人太沢三之助、木戸忠太郎と知り合ったのが縁で紅葉の面識を得たのである。小波と年齢が四つしか違わない新兵衛は収入もあり、食費も払ったので客分的な扱いを受け瓦山、湖山からも兄貴分としてたてられた。この頃、小波の家で不定期に開かれていた書生との文学談義会は、一六居士の書生を含めて六畳の書生部屋で行われたが、時には新兵衛は小波の部屋まで押し掛けたのである。ところが、瓦山、湖山は自分達より遅れて小波に接近した新兵衛が自分達を差し置いて抜け駆けする行状を心よく思わなかったのである。湖山が小波に不平を申し出ると、毎週木曜日に書生一同が会合して文学研究の一夜を過すことに決められたのである。これが木曜会の濫觴であった。日記に初めて記されたのは、明治二十九年三月二十六日の「木戸、森愛来訪 皆々にて文話会十一時迄」である。木戸とは木戸忠太郎（解剣）、森愛とは森愛軒（のち名古屋新聞副社長）、この日、新兵衛に誘われ出席したのである。第三回目（明29・4・5）になると、関西学院時代の新兵衛の友人で日報社の鶴崎鷺城や、又、のちになって美育社を創立する赤木巴山、硯友社の細川風谷が加わり、四回目（明29・4・16）には小波の独逸協会学校時代の同級生高階柳陰が加わった。六回目（明29・4・30）には柳川春葉、小栗風葉が参加し紫吟社と重なる構成メンバーとなり、その日は運座が開かれた。八回目（明29・5・14）には小波の弟春生が、十回目（明29・5・28）には湖山の叔父で『文庫』の編集にあたった西村落山が出席した。十二回目（明29・6・11）には木曜会臨時運座が開かれ、前記のメンバーの他、向井大放、池田研池、広津柳浪が参加した。十六回目（明29・7・30）には生田葵山、田中松太郎が新加入。「小波日記」では二十四回目（明29・9・17）から木葉会と記されるようになる（小波独逸婦朝後の明治三十七年からは再び木曜会となる）。明治二十九年九月になると細川風谷が日本郵船に就職して木曜会から去る。二十六回目（明29・10・22）に『国民新聞』の中野其村、三十三回目（明29・12・17）には前田文吾、

加藤眠柳が参加し、三十六回目（明30・1・21）の新年会には栗島狭衣、武田桜桃も参加するなどメンバーはふえ続けた。明治二十九年十一月一日には初めて木曜会員は近くの写真館で写真を撮ったのである。

やがて、性行不良の瓦山が放逐される。⁽¹⁾

明29・12・7 夜久留島来談 瓦山の件

明30・1・17 朝 本日瓦山放逐ヲ決す 但し昨夜不帰 今朝帰る

明30・1・18 今夕 池田瓦山いよいよ西帰

その翌日、生田葵山が玄関子となる。

明30・1・19 本日より生田葵山寄宿せしむ

日記には秋声会や紫吟社の記事も多くあるが、木曜会定例日と重ならず、名士招待宴等以外は、ほとんど木曜会を優先している。初めの段階では玄関子を中心に内輪で開いていた小波も、回を重ねるごとに外部からの出席者が多くなり、次第にこのような文学会に積極的な抱負を持つようになったと思われる。明治二十九年頃には文学の談話のあと運座が行われていたが、明治三十年頃には、むしろ運座が重きをなし、時には酒を飲み、やみ汁や隠芸をしたり遠足会と称して亀戸天神、長命寺、浅草を回ったりした。このように遊戯的傾向が顕著になってゆくが、それも小波なりの抱負の実践であったに違いない。この頃、『太陽』（明30・7・8）に「文学会に就て」と題した論文を発表しているが、小波は其中で「文学的文学会に非ずして、寧ろ社交的文学会」の組織を提唱している。さらに組織の目的、事業、手段、名称、会員について簡条書きにしているが、例えば会員については「詩人も来れ、歌人も来れ、小説家も来れ、批評家も来れ、和学者、漢学者、新聞記者、雑誌記者、俳諧師、新体詩人、来れ／＼、来る者は抗まず（以下略）」と記すなど木曜会の実態に近い。目的では「文学者双互間に於ける確執、反目の悪習を打破し儉安姑息の弊

風を矯正して、以て其交際を円滑に、眼界を広大ならしめ（以下略）と記したが、それに対して『早稲田文学』（明30・9）が会の枢機を握り、党同異伐を図る者がかえって現出する危険性を指摘した時、小波はあえて硯友社をはじめ文壇派閥名を列記して、その各派から代議委員を推挙して合議的運営をすればよいと反論を加えた。⁽²⁾「文閥」そのものの解消撤廃は棚上げをしているが、こうした定見を持った小波の木曜会は意外に「文閥打破」と叫ぶ時代潮流にそった試行といえるかもしれない。だからこそ、木曜会員達の反硯友社文学の言動にも小波は寛容な態度をとり続けえたのであろう。この頃、のちの白樺派を髣髴させる美術家と文学者との会合「文学雑話会」に小波が積極的であったのも、その意味でごく自然な成り行きであった。

明30・11・23 上野精養軒文学雑話会に赴く 会するもの文学家美術家八十余名柳原伯も来合す

明31・11・30 紅葉館に赴く本日文学美術雑話会及江見送別写真を取る

明32・1・19 四時上野梅川楼ニ赴 文美雑談会々するもの六十余名 福地 外山演説朗読

このように閉鎖的な「文閥」を乗り越えようとする小波の志向がみられるが、実は、この時期紅葉との間に微妙な確執が生じ、硯友社の存在が重く小波の上にのしかかっていた。というのは小波は京都日出新聞社時代からの馴染であった永原敏に一中節を習っていたが、この敏の件で小波の母や紅葉、水蔭、思案ら硯友社々員からクレームがつき、小波は対応に苦しんでいた。

明30・4・30 午前母上来談 対敏及友之件

明30・5・4 夜永田来談 対永原の件

明30・5・20 永田来館 敏事件語る稍決す

明30・5・30 五時頃紅葉を訪 対永原の件異見さる

明 30・5・31 八時頃江見来る 一泊 永の件語る

しかし、小波は彼等の忠告にもかかわらず敏に借家を探させた(六月二十五日)。思案も反対した(六月二十八日)。紅葉は小波の反抗に似た態度を怒った。

明 30・6・29 不在中紅葉来 永原の件絶対的反対の由 母及湖山に語り去ル

小波は驚いて翌日紅葉を訪ね「更に一考せんとて別れ」たのである。しかし、小波は強行した。

明 30・7・22 本日 丹波丁の宅より先づ五番町四番地移転

明 30・7・24 今朝五番町へ移転

紅葉は怒ったが、既成事実を作り上げた小波になすすべはなかった。しかし、やがて紅葉は、湖山、葵山を使って画策した。

明 30・11・11 夜紅葉来隠岐氏来る。又永田も招く 三生及敏 余等に明日より一まづ別住宣告

紅葉は湖山、葵山をして別居を宣告せしめ、小波を改心させようとしたのである。

明 30・11・12 今朝 生田 黒田二人は久留島方、敏は永田氏方に赴く

明 30・11・14 敏 今日いよいよ最後の決心をなす 永田氏方を去れり

明 30・11・16 隠岐氏今日高森に敏に会す 漸く彼の意を聞く 隠岐氏仲際^(中) 久留島 黒田 生田三生に会す隠岐

方に小酌、二生は別居に決す

明 30・11・18 夜永原隠岐氏を訪ひ来る 余も出で 又永田氏も会す。新借の室屋に於て最終談判遂ニ手打

この折、永原敏に百円と扇金三十円、他に五十円を払うことになった。扇金とは再び烏森で芸妓となる支度金という意味だろう。このような経過で、湖山、葵山は小石川原町一行院に住むようになる。紅葉の画策に軽はずみに乗っ

た門人らしからぬ態度に隠岐氏は怒ったのであろう。次のように記されている。

明30・11・20 午後荷物仕分け 隠岐氏立会ふ 彼黒田 生田を罵る

小波は敏に渡した金の大半を紅葉から借りた（十一月十六日の日記の金銭欄に百円借りた事が記されている。大橋や永田からも借りた）。小波は紅葉はじめ硯友社同人に恩情を感じた一方で、束縛と深い負い目もまた感じたに相違ない。この事件は『万朝報』（明30・12・7）の「照魔鏡」欄で素破抜かれた。その六日前、松居松葉がこの件を密告する投書があった事を連絡して来たが、記事を押える事が出来なかったのである。このような事態で、木曜会は沈滞し、定例日にも開かれない事があった。それでも、一部には作品朗読（湖山「愛の音」明30・8・6）、百草園遊行（明30・9・23）、放歌などの木曜会記事が散見出来る。ともあれ、屈折を強いられこそはしたが、川田綾子へ求婚失敗（明29・7）、永原敏事件など異性問題を吹っ切る形となった小波は、翌三十一年六月結婚し、心機一転してお伽噺、少年文学をライフワークにする気持を固めていった。「小波日記」からは外国の児童文学書と真剣に取組んでいる小波の姿を見出す事が出来る。例えば、イソップ物語を買い求め、又、川田鷹（甕江の子息）に外国文献の翻訳を依頼して撰取に努めている。そして主筆の『少年世界』では専ら新しい創作お伽噺を発表し、『世界お伽噺』では世界各国のお伽噺の輸入紹介に励む良く計算された二面作戦をとった。³⁾小波のお伽噺にかける意欲のほどは児童文学初の評論「メルヘンに就いて」（明31・5）に伺えるが、そこで小波は己れのお伽噺が目ざしているものが「御談議」ではなく「御はなし」である事を明らかにした。いわば、その具体的実践ともいうべきお伽噺口演を下田歌子の要請によって毎月学習院幼稚園で試み始めたのもこの頃である。それ以後、彼の婦人会及び教育関係への進出はすさまじいものがある。日記に散見出来るだけでも「婦人教育相談会」（明32・3・28）「錦輝館婦教音楽会」（明32・4・29）「婦人教育会園遊会」（明32・4・8）「華族女学校運動会」（明23・5・1）「大日本女学会」（明32・5・6）「番町婦人教育会」（明

32・11・4)「神田橋外高等女学校同窓会」(明32・11・19)「独乙普及教育慈善会」(明32・12・1)などに出席し、又下田歌子に依頼されて婦人平和会の活動にも協力している。婦人会及び教育会への進出が、お伽嘶や『少年世界』の読者獲得に役立ち、さらには博文館内部での小波の立場を強化した事は言うまでもなかった。

「関渉主義」をとった紅葉の十千万堂藝が徒弟制度的な雰囲気とするなら、「放任主義」をとった小波の木曜会は遠慮がなく「会員各々自分の家の積で」振るまい議論をたたかわせ合った、いわばサロンであった。「来る者は拒まず往く者は追はず」で新メンバーも続々ふえた。例会では小波は自分から強く説を立てる事はなかったから、かえって真剣に文学談義が木曜会では続けられた。たとえば、

小波の脚本「生霊」の朗読(明31・2・24)

近松の「卯月の紅葉」評論(明31・5・12)

森鷗外の「堆木」評(明31・6・9)

愛情論(明31・11・17)

童謡(明31・11・24)

戯曲が話題に上っている事を聞きつけて、恐らく東儀鉄笛は一足先に入っていた蒲原有明(明31・6・16出席)に勧められて出席(明31・9・8)したのであろう。生田葵山に誘われての蒲原有明の入会は、実はその後の木曜会の青年会員の動向に重要な意味を持つ事になる。

II

博文館では『日本お伽噺』の成功を得、続いて『世界お伽噺』を企画するが、その資料となる外国文献の翻訳に蒲原有明は力を尽したのである。「小波日記」における有明関連記述を引記してみる。

明 31・4・3 九時頃、柳原氏ヲ訪ひ 蒲原氏稿料渡し

明 31・5・4 夜蒲原隼雄来訪（号有明）

明 31・6・16 夜木葉会 蒲原新来

明 31・7・27 夕方田山来（筆者注 田山花袋）次で蒲原来

明 31・9・8 夜木葉会 森 蒲原 蒲原東儀某ヲ伴フ

明 31・9・19 蒲原氏ヲ訪ヒ

明 31・9・25 夜世界お伽噺起稿

明 31・10・6 夜木葉会 有明氏ニ英書通読托ス世伽参考也

つまり、『世界お伽噺』起稿間もなく蒲原有明に翻訳を小波は依頼しているのである。

明 32・5・30 夜蒲原氏 生田来

明 32・6・20 九時久留島ニより 又蒲原ニより坪井博士より借用亜弗利加お伽噺訳依頼

明 32・7・22 不在中蒲原氏訳稿持来

明 32・9・3 午前蒲原来

明 32・12・4 柳原氏 蒲原氏と共に来十時去

四月三日の「稿料」とは『文芸偏楽部』掲載の「南蛮鉄」（明 31・5）の稿料の事である。十月六日の記述は『世界お伽噺』第三編の「珊瑚島」「独木舟」の翻訳の件である。翌年六月二十日の記述は同じく第十六編「猿智恵小僧」の

(表 1)

	地域(時代)	篇数
太古 支那 南洋 多島洋(ポリネシア) オースト ラリア モタ島 独逸 英国 露西亞 コサック シベリア 南スラブ 仏蘭西 印度 土耳其 小亞細亞 西亜細亞 亞刺比亞 シリヤ エジプト 希臘 シャム 朝鮮	蝦夷 カンボジア 聖弗利加 洪牙利(ハンガリー) 羅馬尼亞(ルーマニア) 瑞典(スウェーデン) 諾威(ノールウェイ) フィンランド デンマーク ヒンランド トランスワール 氷州(アイスランド) 愛蘭土(アイルランド) イタリア(シシリア) ラブランド オランダ アルプス地方 北アメリカ 南アメリカ	三 一 五 一 一 三 一 一 一 三 七 三 二 三 四 九 六 十一 一 一 三 二 四 一
		四 七 一 三 八 七 一 二 五 三 三 六 二 五 一 一 四 四

翻訳の事である（翻訳原典は表②参照）
初め『世界お伽噺』は二十四巻を予定していたが、好評のため百巻となり、ほぼ九年を費す事業となった。収録されたお伽噺は付録も合せて百四十六編収録地域分布は表①のように約四十二地域（時代）にわたる。⁽⁵⁾
この大事業にドイツ語の出来た小波は、たとえオットーの「メルヘン」等の文献を利用したとしても「世界」のお伽噺の収集は彼一人では非常に困難であった。だから多くの助力を必要としたのである。「小波日記」には、収集の苦勞のほどが記録されている。

明31・9・13 高山氏ヲ訪フ土井

晚翠氏ニ会
ミト

ロギー借

- 明 31・9・23 午前向柳原町上田万年氏ヲ訪ひツルーストリーイ借る
- 明 31・9・27 夜五万石草し 又 プロソトイス研究
- 明 31・9・30 九時後大学ニ上田万年氏ヲ訪 図書館ニ□□書籍借入 帰途南風堂ニメルヘンガアゲン求め十一時帰館
- 明 31・10・9 午後原田照氏来 米国タソウヒス氏へ昔噺贈及紹介の件
- 明 31・11・18 郵船社ニ川田訪フ 英語書籍発行紹介依頼する
- 明 31・12・9 夜坪内氏ヲ訪ヒ借本返ス
- 明 31・12・19 夜鈴木氏一寸来 シュンヒハウゼン訳托す
- 明 32・2・7 メルヘン読む
- 明 32・4・3 鈴木於兎平氏ヲ訪ネ露国お伽噺を聞く
- 明 32・4・8 露国お伽噺草す
- 明 32・4・9 グリン氏書返す
- 明 32・4・29 南風堂にメルヘン三種求
- 明 32・5・6 独乙岡田より書三冊来
- 明 32・5・10 夜アラビア物語訳す
- 明 32・6・3 本日フレベル会 旧友三輪信介及坪井正五郎氏の講演ヲ聞ク 亜細亜諸国小児ニ関スル風習
- 明 32・6・19 十時 大学坪井博士ヲ訪 世伽原書借入
- 明 32・7・2 木村氏を訪 カブテンの原書返ス

明 32・7・21 不在中蒲原氏訳稿持来 夕方鈴木氏来 Vorwies 訳託

明 32・7・30 偕東園ニ赴ク 山田氏後ヨリ共ニ食事 土耳其お伽噺ヲ聞ク 十時半去ル

明 32・7・31 坪井博士ニ書ヲ返ス不在

明 32・8・27 土耳其お伽噺脱稿

明 32・8・28 不在中 鈴木氏ライネケ翻訳持来

明 32・9・29 朝元園丁散歩 春生へ翻訳印度お伽托ス

明 32・10・2 理科大学坪井博士ヲ訪ヒ世伽材料二部借入帰館 春生来印度お伽訳持参 山田来印伽原本渡ス

明 32・10・23 春 翻訳持来

明 32・11・8 南風堂レクラム求め

明 32・11・10 鈴木レクラム送り翻訳依頼

明 32・11・29 大学に坪井博士ヲ訪 本返又借

明 32・12・4 午後四時帰 春生来 エスキモ原書貸 夜読書

明 32・12・11 南風堂によりメルヘン ロマーン等求ム七円(月末払)

明 32・12・16 ウェストン女史ヲ訪ヒ少年書籍借ル

始めの予定でいけば最終編となるはずの第二十四編を脱稿したのが明治三十二年十一月二十七日、発行したのが翌年十二月二十日だ(6)から発行は遅れ気味だが、執筆の方は諸氏の協力を得て相当のスピードであった事が分る。『世界お伽噺』第一編序文に記されているように、初期の諸編は文部省専門学務局長上田万年、農科大学教授北尾次郎、外国語学校教授鈴木於菟平、及び鷗外、樗牛、逍遙、露伴、依田学海、長田秋濤ら学者や文学者の手を借りている。し

(表2)

編	作 品 名	協 力 者	資 料 及 原 典
二	「珊瑚島」「独木舟」(南洋の部)	上田万年 蒲原有明	マツキスミユルレル 『南洋の神話及歌謡』
六	「鬼婆と少女」「兵卒と悪魔」(露西亜の部)	鈴木於夷平	バシーストフ『フレスト、マアチャ』
十三	「予言者」 (印度の部)	上田万年 石橋思案	ジョセフ・ジャコブス『印度お伽噺』
十四	「王城乗取」「池の焼餅」 「姫島の灯台」 (土耳其の部)	山田寅次郎	
十六	「猿智恵小僧」 (亜弗利加の部)	坪井正五郎 蒲原有明	マク・コール・テアール 『亜弗利加の民間口碑』
十七	「酋長征伐」「魔像退治」(多島洋の部)	坪井正五郎	ジョージ・グレイ『ポリネシア神話』
十九	「鷲の路」(フロリダ島の部)	坪井正五郎	コドリントン『メレネシアの研究』
二十三	「梟の恨」(モタ島の部)	坪井正五郎 巖谷春生	ミルラア『亜細亞洲の子供』
二十四	「三人片輪」(アジア・トルコの部)	坪井正五郎	
	「白い鳥」(蝦夷の部)	坪井正五郎	
	「稗の神」 「月の男」(蝦夷の部)	幸田露伴	
二十五	「消炭太郎」(コサックの部)	柴田流星	アール・ニスベット・ペイン『コサックのお伽噺』
三十四	上篇「紅の橋」(南アメリカの部)	桜井鷗村	人類学会報告書中の「カックルの旅行」
三十七	「浮かれ胡弓」「喋べり姫」(スウェーデンの部)	桜井鷗村 黒田湖山	アスビョルセン『世界口碑集』の瑞典・ 諾威の部
五十八	「二子草子」(ルーマニアの部)	木村小舟	
七十四	「世わ情」(ノールウェイの部)	黒田湖山	アスビョルセン『世界口碑集』 瑞典、諾威の部

かし、木曜会が活発となり、整っていった明治三十二年後半以降になると、彼ら木曜会員が積極的な役割を果たすようになる。例えば、各編の解題に明記されているのを表(2)に整理してみる。

第十四編は土耳其にいた山田寅次郎が明治三十二年の夏、帰国した時小波に伝えたものである（前出「小波日記」明治32・7・30付記述参照）。第二十三編の春生は小波の実弟で木曜会員。第二十五、三十七、七十四編の柴田流星、黒田湖山も同会員。木村小舟は第二十三編が脱稿された明治三十二年十一月十一日、丁度その日に岐阜から上京し小波を訪ねて彼の紹介で博文館に入った事が「小波日記」に記されているが、この五十八編の時点では準木曜会員で『少年世界』の助筆的地位にあった。第五十編跋文では、他に木曜会の千葉（金子）紫草が動員されたと記されている。挿絵も木曜会の筒井年峰、小島沖舟が活躍し、『世界お伽噺』では掲載出来なかった長篇のお伽噺の収録を中心にした『世界お伽文庫』（全五十編）では宮川春汀も協力した。

注目すべきは、この時期木曜会員が小波の部屋に積まれた外国雑誌を含む原書類を手にとって見、又ある者は自分で翻訳するなど直接洋書を通して西欧文学にふれていた事である。例えば、湖山の「狼少年」（明治32・7土肥春曙共訳）『乞食王子』（明治32・10小波共訳）、そして『Harper's Magazine』『The Contemporary Review』誌所載文にもとづいて書かれた荷風の「読書は悪行なり、多く語って少く読め！」（明治35・3）「死後の生活」（明治35・5）も、その副産物といえよう。跋文に記されていない人の中でも、東京外国語学校で学んでいた木曜会きつてのモーパッサン通の西村渚山、シヤトブリアンの造詣深く蒲原有明との関係から入会した小島文六も協力者であった。木曜会の西欧文学趣味は、この『世界お伽噺』の原書下読などによって急速に醸成されていた。しかし、不思議な事は純門下生の葵山のこの場合での役割が日記等から浮び上がって来ない点である。

III

永原事件の折、離反行為をしたにもかかわらず、その後小波は湖山、葵山の独立に骨折っている。

明31・1・7 三時出勤途中、湖山に会す 中央社の件

明31・1・8 大岡社長に会 湖山入社に伴い将来を依頼す

こうして湖山を中央新聞社に入社させた。やがて葵山も神戸新聞社に送った。

明31・8・3 生田二十五円貸す 彼神戸新聞赴任の為なり

明31・8・4 夜木葉会 生田葵山神戸新聞に向って出発

しかし、一ヶ月も経ぬうちに葵山は編集長江見水蔭と折合い悪く帰京してしまった（八月二十五日）。その後も小波は別の所を紹介するが、そこもうまくいかなかった。

明31・9・28 生田会す 生田へ異見

明31・10・7 夜生田来る異見

葵山は門人としては出来が良くなかったようである。こうした事もあって葵山は木曜会の外部へ眼を向け、花袋、有明、平尾不孤、藤井紫明らと接触していった。のちに葵山は「その頃から先生と私とは、文学上の迫る路の異つてゐる事には気が着いてゐた」と小波とのへだたりを回顧している。続けて葵山は「翻訳されたものによって、既にドストエフスキやツルゲネーフの愛読者であった。事実尾崎紅葉先生の作物にすらも服してゐなかった」という。しかし、小波の「鷹揚な寛大な」性格ゆえに木曜会を離れなかった。小波は『世界お伽噺』の編著だけではなく、俳人と

しての活動もしており、博文館の企画した『俳諧文庫』二十四編のうち『俳論集』（明32・2）『統俳論集』（明33・6）を担当したが、葵山は反発心を伏流させながら湖山や小島文六と共に校正の手伝いをしていた。

明32・1・9 俳諧論集校正初まる

明32・1・13 黒田来俳論集校正

明32・1・22 黒田 生田 小島来校正

明32・2・24 紅葉ヲ訪フ俳論写真托ス（筆者注、紅葉は当時写真に熱中していた）

結果的には、木曜会を飛び出す事も出来ないこの曖昧な葵山の態度が、木曜会外部で吸収していた西欧文学の趣を木曜会に流入させ、時代の先端の問題に木曜会員に触れさせる機会を作った事も否定出来ない。やがて、純門下生のうち久留島が『軍事彙報』に招聘されたのも束の間、同誌が廃刊して（明32・5・29）箱根に引っ込みそしてセールの商會へと実業界へ転進した為、木曜会では湖山、葵山がより一層指導的立場となった。明治三十三年一月『幼年世界』が創刊されて小波がその主筆となったが、その反面、『少年世界』の月二回発行が一回となってしまった。いわば、木曜会員の発表舞台がせばまる危機感のなかで、葵山、湖山の二人は小波が少年文学に埋没してゆくのに抗うような動きをみせる。湖山は中央新聞記者となって以来、中野其村らと交わり反硯友社文学という色合の濃かった社会小説に関心を持ち、葵山は花袋や不孤など文壇になかなか受け入れられなかった青年作家と接触し新進作家の台頭を目論んでいた。それゆえに、この二人は硯反社々員小波の門下でありながら硯友社文学批判という点で妙に一致していた。彼らは「文壇を論じ、硯友社の傾向を罵倒し、仮令現在に容れられずとも、欧州大家の作品に倣って勉強し未来の文壇に覇を称へようと熟議した」りした。それは硯友社の先輩連から睨まれ、小波の渡独後の『少年世界』の主筆が江見水蔭になった時、同誌さえからも締め出されていく反動を招く事になる。二人は木曜会の活動の橋頭堡を築くべき

『活文壇』（発行元大学館）を復刊させた。すでに菊判（第一巻）新聞紙判（第二巻）の二度も廃刊に追い込まれていた同誌を復刊にこぎつけたのは大学館社員の木曜会員井上啞々の尽力によるものである。渡独中ゆえに小波の影響力から解放された編集主任の葵山は、西欧文学志向を強く打ち出した。端的に表われたのは一巻、二巻にはなかった海外文壇欄を新設した事である。同欄では柴田流星が腕をふるい、そして海外文学の現地通信には当時諸外国にいた木曜会に近い人物をあてた。伯林には小波、倫敦は武田漁舟、市俄古は石見三岳、巴里は匿名MK氏、桑港には和田芳橘、羅馬には『世界お伽噺』のためにしばしば資料提供をした田中松太郎、秘露は『短笛長鞭』の詩人今村牧童（野田敬天）、そして上海では久留島武彦が担当した。無論、露西亜、北欧などが欠けている反面、秘露が入るなど多分に御都合主義であった事は否めない。しかし、「海外文壇」では、例えばサンフランシスコで日本人が発行していた『解州文学』でキップリングのお伽噺が掲載された事、米国も文士講演が盛んな事、又は木曜会で話題の作家トルストイの動向を記す一方で、著名でない欧米作家についても現地ではどのように受け入れられているかなど、極めて新鮮なニュースを伝え、世界の文学動向をほぼ同時に捉えていたのである。外国論文紹介に力を入れようとし二高から帝大に入ったばかりの若尾瀾水（子規門人）を起用した。他の木曜会員では中央新聞の高橋鬼川（明32・9・24出席）が、若きウエルテルの哲学的悩みと明治青年の卑小な悩みを比較し、押川春浪はキップリングの生活を紹介し、千葉紫草は『世界お伽噺』の原書翻訳手伝いの成果と思われるアンデルセンの詩の翻訳紹介をしている。しかし、この斬新な編集方針を持った『活文壇』は他の投書雑誌『新声』や『文庫』の狭撃に会い廃刊となる。西欧文学鼓吹で一致をみせていた湖山と葵山は「文壇問題」を棚上げしたまま三巻三号から紅葉を俳句選者として起用するかどうかで食い違いをみせ、二人の間に懸隔を生じさせた。妥協を許さなかった湖山は『活文壇』終刊のあと赤木巴山と共に「文学者より見たる社会観」と冠した『饒舌』を創刊（明35・2）し、紅葉など文壇大家をはじめ世俗の権威に対して

諸譜の筆をふるった。一方、葵山は『饒舌』にはほとんど執筆せず『明星』や『龍土会』周辺の人々と歩みを共にしていった。小波の滞独時代の日記をみると木曜会との連絡は、ほとんど湖山を通じて行われていた。しかし、小波と距離を置きつつあった葵山より、むしろ信頼していた湖山のこのような高調子になった動きに、小波は「目下の流行は……(中略)……青年の文筆を弄する輩の放言」と『饒舌』の事をほのめかす様な紅葉の怒りの手紙(明35・3・17付)を受取って、一層困惑していたにちがいない。やむなく湖山に苦言を呈し始めた(『ハイカラー』8号 明35・8)小波は、間もなく帰国する(明35・11・5)。そして、木曜会の主導権は小波に奪還され、それまでの激しさを払拭するかの様に木曜会は小波が野心的になっていったお伽芝居や絵葉書制作、俳句会中心の形に戻ってゆく。小波脚色「狐の裁判」「浮かれ胡弓」(『世界お伽断』所収)の本郷座でのお伽劇上演(明36・3・4)及び少年雑誌『日本一』創刊には湖山も参画したのである。木曜会のメンバーを駆り立てていた西欧文学熱は、皮肉にも「生田葵山、黒田湖山両君から頻りに外国文学の趣を説き聞かれ」て少々辟易していた永井荷風にうけつがれてゆく事になる。

注

- (1) 『小波身上断』(大2・2)の「食客伝(上)」に記された第一号氏とは池田瓦山の事である。
- (2) 「再び文学会に就て」『読売新聞』明30・10・2
- (3) 「お伽身上話」『世界お伽断』第八十六篇 明39・8
- (4) 「巖谷小波氏を中心とする木曜会」『文章世界』明45・3
- (5) 各編の解題及び内容によって分布を記した。桑原三郎『諭吉 小波 未明——明治の児童文学——』(昭54・7)の三百十八頁に示されている数字とは異なる。同書の分布数字は『世界お伽文庫』などに掲載されている『世界お伽断』の「広告」によっているものと思われる。しかし、例えば六十四編は「広告」では琉球としてあるが、実際の内容は解題で記されてい

るように朝鮮の部にあたるなど「広告」の記述は間違が多い。

- (6) 国立国会図書館所蔵本は発行日の十二月七日の箇所「大橋」の訂正印が捺され、十二月二十日に変更している。
- (7) 生田葵山「小波先生と私」『文章俱樂部』大8・2)
- (8) 明治37年1月24日には木曜会紅彩画展覽会を開き青梅の鵜沢四丁等百余名の入場者があった。
- (9) 永井荷風「書かでもの記」(大7・4)

〈付記〉 本稿のなるについて、明治大学和泉校舎視聴覚室には資料閲覧等御高配賜った。深く感謝申し上げます。